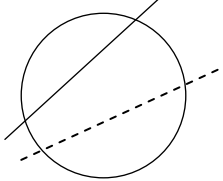


## 『Kマスター 数的処理』(KU18002)

## 訂正表

2018年03月20日現在

ページ	訂正箇所	訂正内容	掲載日													
P. 57	肢1 表内	誤	2018/03/20													
		<table border="1"> <tr> <td></td> <td>1回目</td> <td>2回目</td> <td>3回目</td> <td>4回目</td> <td>5回目</td> <td>合計</td> </tr> <tr> <td>①</td> <td><u>1</u></td> <td><u>2</u></td> <td><u>2</u></td> <td><u>7</u></td> <td><u>8</u></td> <td>20</td> </tr> </table>			1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	合計	①	<u>1</u>	<u>2</u>	<u>2</u>	<u>7</u>	<u>8</u>
	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	合計										
①	<u>1</u>	<u>2</u>	<u>2</u>	<u>7</u>	<u>8</u>	20										
P. 156	<解説>以降	正	2018/02/09													
		<p>(1) 分割される領域の個数が最小となるとき 円に新しく引く直線がそれまでにある直線と円内で交わらなければよい。 このとき、直線が1本増加するごとに、直線が増加する前は1つだった領域が2つに分割される。</p>  <p>直線の本数を <math>n</math> とすると、領域の個数は初項2、公差1の等差数列となる。</p> <table border="1"> <tr> <td>直線の本数</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>5</td> <td>...</td> <td><math>n</math></td> </tr> <tr> <td>領域の個数</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>5</td> <td>6</td> <td>...</td> <td><math>n + 1</math></td> </tr> </table> <p>上表より、直線が5本のときは、領域の個数は6個となる。</p>		直線の本数	1	2	3	4	5	...	$n$	領域の個数	2	3	4	5
直線の本数	1	2	3	4	5	...	$n$									
領域の個数	2	3	4	5	6	...	$n + 1$									
P. 157	12行目	誤	$16 - 10 = 6$ (個)													
		正	$16 - 6 = 10$ (個)													
P. 157	13行目	誤	よって、正解は肢1である。													
		正	よって、正解は肢5である。													

なお、問題文に「どの直線も円内に必ず交点を持つ」という条件が追加された場合、解説のようになります。  
条件を追加し、解説の内容に沿って講義を行っている講師もおります事を申し添えておきます。

※「掲載日」は、上掲訂正情報がLECホームページの『公務員 テキスト改訂・修正情報一覧』(<http://www.lec-jp.com/koumuin/kaitei/>)に掲載された日付です。